

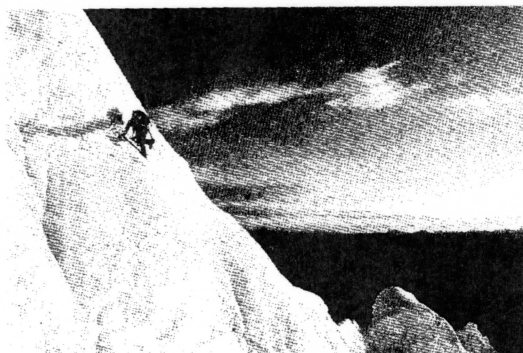
り、到底壁に取り付ける状態ではなくなってしまい、渋々とBCへ引き返す。

シスパーレ2回目の挑戦

ここまでできたら我慢比べ。壁の雪が安定して、安全に取り付けるまで、最後のチャンスにかける。予報では晴れになっていても、シスパーレの山頂だけは常に曇っていてなかなか姿を見せることはない。明らかに登山前半の天気とは変わってしまった。

8月17日、午前中の数時間だが、天気が回復し、シスパーレの壁に陽が当たった。翌18日も相変わらずスッキリしない天気だが、意を決してBCを立つ。歩き慣れた迷路氷河を横断し、いよいよ北東壁に取り付く。初日はセラック崩壊の危険性が高いレンゼから始まるが、案の定大きな崩壊に捕まる。最初は小さな崩壊で少し雪を被ったぐらいで済んだものの、2回目は大きな音と雪煙で、見るからにこれはヤバイという規模。急いで逃げるも途中でクレバスに片足がハマリ、繋いでいるロープもピンと張られ、お互いが中途半端にしか隠れられず、1分ほど爆風雪にさらされる。しばらく息ができないほど強烈な風であったが、お互い埋まることはなく、事なきを得た。逆にこんな大きな崩壊にあっても、なんとかするという吹っ切れがついたのと、さすがにしばらく大きな崩壊はないだろうという勝手な安心感で、その後はスムーズに通過できた。天気の影響で出発が遅れたこともあり、初日は予定より少し手前の雪稜上で整地して幕営。

8月19日、テントサイトより尾根を乗っ越して60〜70°の氷雪壁に取り付く。少し雪が被っているものの、ほぼアイスクリューでランナーが取れた。スピードをあげる為、中間支点は1本でひたすら同時登攀を続ける。スピードは早いものの、ふくらはぎは徐々に悲鳴をあげている。S字状の氷雪壁を越え岩壁にぶつかったら、基部を左へ4Pトラバースしてレンゼ状岩壁に取り付く。この頃から天候は崩れだし、頭上からひっきりなしにスノーシャワーが降りかかってくる。当初の予定では、岩壁基部でビバークできるかと思われたが、そんな場所は一切なく、抜けきるか今日のスタートまで戻るかを選択しかなかったので、降りしきるなかクライミング再開。薄氷ではあったが、なんとかスクリューでラ



▲near C1



▲between C1 to C2